

2021.8.29

ご報告：8/28 第 24 回働学研

十名 直喜

8月28日(14:00~16:45)、第24回働学研(博論・本づくり)研究会が開催されました。

5本の発表があり、下記24名にご参加いただきました。

(敬称略：井手、太田、岡崎、小野、片山、金井、熊坂、小林、佐竹、佐藤、澤、槌田、程、中野、中谷、野口、波多野、濱、平松、藤井、松浦、三輪、横田、十名)

興味深い発表が続き、多様な視点からのコメントや質問、リプライなどで、議論も盛り上がりました。

なお、発表予定の岸本さんが、当日のオンライン研究会にアクセスできないというアクシデントがあり、発表中止を余儀なくされました。

8/28 第 24 回 働学研プログラム

発表 15分+議論 15分=30分/本：計 180分、司会:十名、画面:澤

第 1 分科会 エシカル・コモンズ・地域文化 14:00~15:00

三輪昭子：「エシカル消費と CSR ー博論構成と序章」

濱 真理：「コモンズ考」

岸本正美：「遠野と花脊(京都市の山間部)の交流」からグローバル経済へ」(中止)

第 2 分科会 ICT・サービス・学習 15:00~16:30

野口 宏：「情報財とサービス財を考える」

澤 稜介：「書評 十名[2021.7]「ICT が問い直す生産力・技術・労働・物質代謝論」

小野 満：「学習と研究 ーわが生涯の転換点」

三輪さんの発表に対して、いくつかのコメントが出されました。市民・企業・社会という枠組みでの分析は壮大だが、焦点を絞る必要もあるのではないか。分析の枠組みに国家・政府(さらに国連)の視点を入れるべきではないか。仕上げに向けての工程表の提示を、など。

濱さんの発表に対して、コモンズの理解と評価をめぐって議論が白熱しました。森林や漁場などの共有地論から、現代は大きな広がりを見せているのではないか。里山資本主義の里山、さらに地球環境も地球コモンズとみなす議論など。また文化資本など無形のコモンズ論も。「コモンズの悲劇」という歴史的な原点をふまえるべき、など。

野口さんの発表は、情報技術論、サービス論をめぐるこれまでの深いご研究を、コンパクトに提示されました。それでもサービス論をめぐるとの論争は理解も難しかったようです。それに対して、いろんな角度からの指摘もありました。無形・有形とは何か、無形論としての使用価値論、使用価値と固有価値論の関係、効用価値論との関係など。

澤さんの発表に対して、後半に示された図表、とくに「図 現代の資源消費とタイムライン」を中心に、興味深い指摘がありました。「資源消費」を鉱物資源などの原料に限定していいのか、「資源」とは何か。環境容量、資源消費の限界点をいつ頃とみるのか。労働生産性から資源生産性への価値評価シフトが起こっているのではないか。知的財産権問題とオープンソース、プラットフォーム論は、どのような関係にあるか、など。

小野さんの発表は、89年の生涯をふり返り、仕事と研究から総括されたものです。4つの危機・転機のうち2つが集中したのが、1970年代。「2 ニクソンショックとオイルショックは何だったのか」「3 基礎研に会う」。2つの危機と転機をめぐって多くの指摘がありました。89歳にして健脚で旺盛な研究意欲の源は何か、そのノウハウ伝授を！ その点をめぐる議論が大きく盛り上がり、納得しながらの研究会閉幕となりました。

なお働学研終了後に、波多野先生から発表&議論について、下記のメールをいただきました。理論・歴史よりも政策・理念の傾向がみられるとのこと、重要なご指摘とみられます。そこで、小生もリプライをお送りしています。付記に添付していますので、ご覧いただければ有難く存じます。。

以上、よろしく願います。 (十名)

<付記>

「今日はありがとうございました。

いずれのご報告も、長く深い射程のもとに取り組んでこられたご研究を背景にしておられるので、少し聞いただけで簡単に感想を述べるのはむずかしく、なかなか発言ができませんでした。

それにしても、現代社会の問題に対してさまざまな観点からの真摯な提起に触れることができ、こういう知的コミュニティが持続的に営まれていることは心強く、またこれに参加出来ますことを幸せに思いました。十名先生のご努力のおかげだと思います。感謝申し上げます。

ただ、現代社会の問題にアプローチする際に、何が起きているか、起きている事柄は人間にとってどういう意味を持つかについて共通理解を深めようというよりも、方向として「いかにあるべきか」という理念的ないし価値的立論が先行しているように思われましたが、これは最近の傾向なのでしょうか。」(2021.8.28 波多野)

「昨日の働学研、お疲れさまでした。また貴重なコメントをいただき、ありがとうございます。

現代社会の諸問題に対して、どういう意味をもつかという分析よりも、「いかにあるべきか」論が先行しているとのこと。理論・歴史分析よりも、政策論・理念論が先行する傾向が感じられるのご指摘かと思えます。肝に銘ずべきご指摘、と受けとめています。

大学人研究者は前者に偏る傾向がみられるのに対し、社会人研究者は後者から入る特徴があるのかもしれませんが。社会人研究者は、職場での問題意識などにより後者から入るも、そこにとどまらず理論・歴史に分け入る努力が大切かと思えます。

小生、30歳代の鉄鋼マン時代に、よく似た指摘をされたことがあります。逆の立場から。企業内で経営・労働問題研究会をインフォーマルにもち、研究成果を数十ページの冊子として年2-3回発行していました。

かなりの知的集団といえます。その中であって、小生の場合、理論に立ち返る議論が多かったようです。現場でたたき上げた熟練組織者から、「霞（かすみ）を食って生きているよう」と揶揄（批判）されたことがあります。

それでも、深く理論的に掘り下げるスタンスを貫いたことは、現場研究会の知的活力と寿命を高めたと感じています。その後、10数年にわたって冊子の発行を続けることができました。大学に転じてからも、参加していました。阪神大震災、その直後に相棒の友を亡くすまで続けました。自己流ながら、理論・歴史と政策のアプローチの両立を図ってきたと感じています。

30数年を経て、働学研において、新たな形で問われているのでは、と感じています。

いろいろと感じられたときは、ご遠慮なさらずに、どんどんご発言していただきたく存じます。どうかよろしく願います。」(2021.8.29 十名)

2021.8.29

9/18 第 25 回働学研に向けてのお願い

十名 直喜

9/18 第 25 回働学研は、国際文化政策研究教育学会の文化政策セミナー（9/18-19）の一環として開催されます。

働学研のみならずセミナーの全体プログラムも、すでに出来上がり、学会員にアナウンスされています。

発表資料については、9月上旬(遅くとも9月10日)までに、お送りください。

また、ご参加のお知らせ、お待ちしております。

よろしく申し上げます。（十名 tona@iris.eonet.ne.jp）

9/18 午後（13:30～17:00）：環境・文化・技術の 21 世紀的諸相と課題

働学研（博論・本づくり）研究会

（司会：十名、画面：澤 発表 15 分・議論 15 分：計 30 分/本）

第 1 部：21 世紀の都市づくり ー環境&文化価値の向上

程 遠紅：「博論目次 & 第 6 章 中国における環境教育の現状と課題」（30 分）

高松平蔵：「価値集積地としてのドイツの中心市街地」（30 分）

杉山友城：「福井から眺める地域づくりの視点ー獲得・親和・学習・防衛」（30 分）

第 2 部：21 世紀「大工業」の諸相と課題

片山勝己：「工具調達の仕組みと効率化方策 ー大規模製造業を中心にして」（30 分）

太田信義：「CASE」における技術アウトソーシングの役割と課題

ー自動車における技術大変革の到来」（30 分）

第 3 部：ICT と地球有限時代の生産力とサステナビリティ

平松民平：「ICT が促す「新しい生産力」（30 分）

十名直喜：「地球有限時代の生産力概念とサステナビリティ」（30 分）